

平成26年度 校内研修計画

大藤小学校

1 学校課題

大藤地区は緑が豊かで、桃やすももなどの果樹栽培を中心としている地域である。学校と地域との結びつきが強く、保護者や地域は学校教育に深い理解と関心をもち、様々な活動に協力的である。以前、本校が取り組んだ「開かれた学校づくり」の研究によって、より一層地域との結びつきが深まり、今もなお継続されている。児童は温かく優しい地域の人々に見守られ、明るくのびのびと生活している。

本校児童は79名。全学年が単学級であり、どの学年も20名未満の、小規模校である。年々児童数は減少している。大規模校と比べると個人指導がいき届きやすいが、やはり社会の変化に伴い、児童一人ひとりの個性は多様化し、学習意欲や学習能力の個人差も大きい。

各学級における児童の実態については、「個人差が大きい」「自分の考えを、言葉や文章で伝えることが苦手である」「友だちの考えを参考にしたり自分の考えに取り入れたりすることがあまりない」「家庭学習をする児童としない児童の差が大きい」などの課題が挙げられている。

2 研究主題

「自ら考え、課題を解決できる児童の育成」

～つながりあい、学びあう学習集団づくりを通して～

3 主題設定の理由

(1) 学校教育目標具現化の立場から

本校の学校教育目標は『自ら考え、正しく判断し、行動する児童の育成』である。具体目標として「自ら考えて学習する子ども」「健康で明るい子ども」「思いやりの心をもつ子ども」「協力しやりぬく子ども」「郷土を愛する子ども」の5つが掲げられている。

「知・徳・体」の調和がとれた人間性豊かな児童の育成を具現化するために、「知」においては基礎的・基本的な学力の定着とともに自分なりに知識を活用し、自ら考え判断したり、表現したりできる児童の育成が大切であると考える。そうした力をつけるためには、子どもたちの実態に合わせた指導を行っていくことが必要となる。子どもたち一人一人を把握し、より良い授業を実践していくことで、「自ら考え、正しく判断し、行動する児童が育まれるのではないか。」と考えこの主題を設定した。

(2) 今日の課題から

現行の学習指導要領においては、「生きる力」を育むことが基本理念とされ、「生きる力」の一つには「確かな学力」が挙げられている。「確かな学力」とは、第1に基礎的・基本的な知識・技能。第2に知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力。第3に学習に取り組む意欲であるとされる。この3つの要素が有機的に結びつくことで、子ども達に「確かな学力」が育まれる。

まずは、共に学び合う学習集団の力を高め、学ぶ意欲をもたせることが大切であると考え。集団の中でこそ子どもたちの学びは深まり、学力向上に繋がっていく。集団の中での励まし合い・支え合い・教え合いなどの関わり合いの経験が、「意見が違うからおもしろい」「友だちも頑張っているから自分も頑張る」といった気持ちをうむ。友だちとのつながりを意識する中で、一人一人の学ぶ意欲が高まり、つながりあい・学びあう学習集団ができていくであろうと考える。本校は小規模校であり、ほとんどの子どもたちが同じ保育園から入学してきているため、子どもたちの人間関係が固定化されている傾向がある。友達の意見に賛同したり賞賛したり、互いの考えを修正したりするなかで、固定化された関係を変えていく必要があると考える。

日々の授業の中で、「教師と子ども」「子ども同士」の互いのつながりを大切にしたい。昨年度までの「思考力・判断力・表現力」の指導の上に立ち、自分の思いや考えを友だちの言葉と関わらせながら話すことができる力が、互いにつながり、学び合う学習集団としての力を高めていくと考える。子どもと子どもをつなげ、学び合う関係を作っていくためには、教師の適切な働きかけが欠かせない。友だちの言葉に耳を傾け、聴き合う関係づくりを行っていくために、これまで以上に、子どもたちが協同的に学び合う授業への転換を意識していきたい。

(3) 昨年度の研究から

本校は、平成22年度からは「自ら考え、課題を解決できる児童の育成～思考力・判断力・表現力を高める指導を通して～」をテーマに研究を進めてきた。今年度は同じテーマの基、5年目の継続研究に入る。

一昨年度は、教科を限定せず今までの研究の積み重ねをもとにあらゆる教科・道徳における思考力・判断力・表現力について研究や実践を行った。そして昨年度からは、国語・算数・理科・社会の主要教科に限定して、思考力・判断力・表現力を高める授業実践を行った。また、Q-Uを活用し、望ましい学級集団づくりにも取り組んできた。

5 研究仮説

『自分の思いや考えを友達の言葉と関わらせながら話すことができる力をつけ、**つながりあい・学びあう学習集団づくり**を行うことにより、**自分で考え問題を解決できる児童**が育つであろう。』

「つながりあい・学びあう学習集団」とは、学習を通じて一人一人が認められ、存在感・価値観を感じることができる集団であり、お互いの意見・頑張り・個性を認め合い、刺激し合って高め合える集団であると考えている。このような集団に育てていくためには、授業の中で子どもたちが積極的にコミュニケーションをとることができるような学習場面を設定することが必要となってくる。また、ただ自分の考えを発表するだけでなく、認め合い・高め合えるような授業を仕組んでいく必要があると考える。こういった授業を続けていくことで、自分で考え問題を解決できる児童が育つであろう。

6 研究内容と方法

(1) 研究内容

- ・「つながり」を取り入れた授業実践および授業公開の実施
- ・CAPD サイクルを活用した授業改善の取り組み
- ・一人一実践の取り組み
- ・児童の実態把握（NRT検査・Q-U検査）
- ・K-13法を用いたQ-Uでの学級づくり
- ・学びを促す学習環境づくり・学習規律

(2) 研究方法

- ・全職員の共通理解を図るために、全体研究会を中心に研究を行う
- ・講師を招いて、児童の実態に合った理論研究を行う
- ・授業公開を行うと共に、授業改善についての研究を行う
- ・NRT検査やQ-Uから、児童の実態を把握する

年間校内研修計画

研究主任 岩下 和子

回	月/日		主な内容	担当	TC要請
1	4 / 3	全	昨年度の研究について、今年度の方向性	岩下	
2	4 / 9	全	学校課題、研究主題、研究内容・方法 年間計画について（授業者の決定）	岩下	
3	4 / 16	全	学校課題、研究主題、研究内容・方法 年間計画の決定	岩下	
4	4 / 23	全	NRT検査の結果より	岩下	
5	5 / 14	全	NRT検査をもとにした、各学年別の 指導重点について	岩下	
6	5 / 28	全	K-13法によるQ-Uの分析と活用	岩下	
7	6 / 25	全	K-13法によるQ-Uの分析と活用	岩下	
8	8 / 13	全	学びあいを取り入れた授業についての 学習会 ・ 教育課程の還流報告	岩下	○
9	9 / 3	全	学び合う学級づくりについての学習会	岩下	○
10	9 / 10	(個)	授業案作成		
11	9 / 17	全	授業案検討①	岩下	
12	9 / 24	全	授業案検討②	岩下	
13	10 / 8	全	☆研究授業	授業者	○
14	10 / 15	(個)	授業の反省・授業案作成		
15	10 / 29	全	授業案検討①	岩下	
16	11 / 5	全	授業案検討②	岩下	
17	11 / 19	全	☆研究授業	授業者	○
18	1 / 28	全	研究授業の反省とまとめ 研究紀要作成について	岩下	
19	2 / 25	全	研究の成果と課題・研究のまとめ	岩下	
20	3 / 4	全	研究紀要作成	岩下	

